

君には絶対恋しない。

第一章

梅の花が咲き誇り、桜の蕾つぼみが見られるようになった三月。

西條詩乃さいじょうしのは、閑静な別荘地に建てられた母屋おむやの書斎から、広い庭を彩る梅林を眺めていた。

昨日の夕方から今朝にかけて降り続いた雨がようやく上がり、今は陽射しを浴びた木々がキラキラ輝いて見える。

なんと美しい景色なのだろうか。

「私の話を聞いているかい？」

突然話しかけられた詩乃は、見事な白髪をした男性に顔を向ける。アンティークのデスクで仕事をしているその人こそ、KUNIIYASUリゾートホテル創業者であり、詩乃の雇い主だ。

国安会長くわんげんは、家族と離れてここ、長野県東信地方で優雅な隠居生活を送っている。とは言っても働いていないわけではなく、地域活性に尽力したり、会社の利になるよう動いたりしていた。

国安会長の個人秘書として住み込みで働き始めたのは、ちょうど二年前の春、詩乃が大学を卒業した年だ。

思い立ったら即行動する性格のため、未だに仕事でミスを犯してしまうこともあるが、二十三歳

になり、ようやく落ち着いて対処できるようになった。

国安会長や須田という顧問の指導を受け、自分を律する術を覚えたからだ。

もちろんまだ甘い部分があるが……

自分の未熟さに詩乃は思わず眉間を寄せてしまうが、すぐに笑みを浮かべて国安会長に頷いた。「はい。現在群馬県入りされている経営企画部の嶋田さんに、電話をかける件ですよね？ このあと連絡を入れ、会長と合流するようにお伝えします。ほのぼの市場イベントにて、営農組合の新田さまに引き合わせたいという旨も同時にお知らせしておきますね」

「そうしてくれると有り難い。そのイベントだが、須田くんだけを連れて出る。君は母屋で待機しておくように。私が戻って来るのは遅くなるから十七時で仕事を終えなさい。いいね？」

国安会長が意味深に片眉を上げて、詩乃に念を押す。

いつもなら、須田だけでなく詩乃も一緒に連れて行くが、今回に限って留守番させるのはいったいどういう理由があるのだろうか。

しかし、国安会長の意図を一介の秘書が推し量るのは難しい。そのため、詩乃は素直に「わかりました」と答えた。

国安会長は満足げに口元をほころばせて、もう行っていいと手を振って合図を送る。

「失礼いたします」

詩乃は頭を下げ、書斎をあとにした。

スタッフが詰める管理室に向かう途中で、詩乃は出勤してきた須田顧問とばったり出くわす。

六十代で三つ揃いのスーツをびしっと着こなすその姿は、とても素敵だ。貫禄のある国安会長と並んでも引けを取らない。

「おはようございます」

詩乃がすかさず笑顔で挨拶すると、須田顧問の表情が和らいだ。

「おはよう。会長はもう書斎かな？」

「はい。既に仕事を始めておられます」

「わかった。私も急ごう。じゃ、またあとでね」

片手を上げて歩き出す須田顧問を見送ったのち、詩乃は再び歩き出す。窓に映る自分の姿が目に入り思わず立ち止まった。

今朝は、ツイードの膝丈スカートにタイトルネックのセーターを合わせ、パールのアクセサリーで胸元と耳朶を飾った。緩やかに巻いた髪はハーフポニーテールにし、背中に垂らしている。

一六センチの細身体型のせいでもそれほど豊満には見えないが、丸みを帯びたEカップの乳房が女性らしさを強調させ、レッドローズ色の口紅を塗った唇が可憐な印象を与えていた。

秘書として見合った恰好はしているが、それは外見だけでも落ち着いて見えるように心掛けたせいだ。

気を付けるべきところは、外見ではなく内面なのに……

小さくため息を吐いた詩乃は、気持ちを切り換えて先を急いだ。管理室でスタッフを統括する宮崎に今日の連絡事項を告げ、嶋田に連絡を入れた。

午後になると国安会長と須田顧問を送り出し、母屋の周囲や庭園を見回り始めた。別荘で働くスタッフは十数人で、通いで来る者もいれば住み込みの者もいる。そんな彼らと話をしては、国安会長に指示を仰がなければならぬ事案をまとめていった。

深い闇が広がり、静寂に包まれた二十四時を過ぎた頃。

国安会長が帰宅すると同時に、家政婦が動き出す音が聞こえた。詩乃は自室のベッドに寝転がり、その気配を感じながら瞼を閉じていたが、一向に眠りは訪れない。

一時間経っても目が冴えていた詩乃は、仕方なくネグリジェの上に綿入れのガウンを羽織り、ベッドを下りて窓際に寄った。

ライトアップされた梅林は、まるで絵画のように美しい。

見事な景色に心が和むも、初めてこの光景を眺めた時の記憶が甦ったせいで憂鬱になってきた。

ここへ来た「本来の目的」を思い出したためだろう。

「そっか……妙に心がざわついて眠れないのは、あれからもう一年経つからなのね」

本来の目的——それは、KUNIIYASURIZOホテルの御曹司のフィアンセ候補から外れることだ。

詩乃の実家は、京都府で慶応元年から続く老舗呉服屋を営んでいる。しかし、十数年前に経営難になり、店を畳む寸前にまで陥ってしまった。

それを助けてくれたのが国安会長だった。

古きものや伝統を大切にする国安会長の考えに感銘を受けた父は、この人の家族に娘を託したいと思い、幼かった詩乃を彼の孫にと差し出した。

国安会長は、孫の一人である国安遥斗のフィアンセにしようとする約束をしたらしい。

大学時代にその話を聞いた詩乃は卒倒しそうになった。でもそうならなかったのは、父が遥斗にはフィアンセ候補が他に二人もいると話してくれたためだ。

そこで、あえて本名の西條姓ではなく母方の大峯姓で面接を受け、国安会長の懐に飛び込んだ。彼の一言でフィアンセ候補を追加できるなら、詩乃を外すことも簡単だろうと思いい行動に移した。

しかし、上手くはいかなかった。フィアンセ候補の誰かが訪れたら、素知らぬ顔で彼女たちを推そうと考えていたのに、遥斗どころかフィアンセ候補たちも現れないとは……

当初の目論見が外れてしまった詩乃は、とうとうそれとなく跡取りの結婚話を口にした。でもその都度さらりとかわされてしまい、今では話題にすらできない。

どうしよう。このままだと本来の目的を達成できない。

詩乃は唇を噛み締め、諦めそうになる気持ちをすぐに頭の中から振り払う。

「やめやめー!」

明日の仕事に備えてもう眠らなければならないのに、自分で気を昂らせてどうするのか。

まだ二年しか経っていないのよ。根気よく耐えれば、きっとフィアンセ候補という枷から逃れられる——と自分に言い聞かせていた時、スマートフォンが鳴り響いた。これは会長専用のものだ。

こんな時間に連絡を入れるなんて、何かあったのだろうか。
詩乃は急いでベッドに戻り、スマートフォンを手を取った。

「……えっ？」

そこには「明日書齋へ来る際、離れにある事業計画ファイルを取ってきてほしい」とあった。
離れとは、国安会長が敷地内に建てたもう一棟の別荘のこと。母屋から距離があるものの、防音設備がしっかりしているため、彼の孫たちは成人するまでよくそちらに泊まって遊んでいたらしい。しかし社会人として働く今は、別荘を訪れてもほぼ日帰りするのでなかなか泊まらない。それもあって、離れは書庫と化していた。

詩乃は月一ぐらいでそこに入って書類の整理をするので、時間をかけずに目的のファイルを探し出せるだろう。明日の朝一番で取りに行き、その足で書齋へ向かえばいい。

そう思うのに、いつしか詩乃の目は離れがある方角へ引き寄せられていた。

「今夜のうちに取りに行こうかな」

どうせ眠れないのなら、先にファイルを取りに行くのもいいかもしれない。

それに、国安会長は仕事で帰宅が遅くなった場合、翌日は早い時間帯から働く習慣がある。つまり明日もそうする可能性が高い。

だったら今夜中に用意をして、明日の朝は早く出勤できるようにした方が断然いい。

詩乃は動くことを決めると、スマートフォンをベッドに置いて準備を始めた。セキュリティカードにもなっている身分証をポケットに入れる。

意気揚々と部屋を出ようとした瞬間、姿見に映る自分が目に入り立ち止まった。

緩やかに巻いた長い髪を乱雑に後ろで結び、身体のラインが見えない綿入りのガウンを着た不恰好な姿に、思わず噴き出してしまう。

こんな姿で母屋を歩いていたら、皆になんと言われるか。でも、住み込みで働いているスタッフたちは既に床に就いている時間なので、誰かに見咎められる心配はない。

詩乃は悪戯を楽しむ少女のように声を潜めて笑い、自室をあとにした。

予想どおり、母屋は静まり返っている。

なるべく物音を立てずに廊下を進み、管理室に向かった。

身分証を使い、制御盤から離れのカードキーを手取る。アクセス記録をたどれば、誰が制御盤を開けたか判明するが、念のためにデスクの上にメモを置いて母屋を出た。

「ううっ、寒い！」

三月に入って日中の気温は上昇してきたが、別荘地は山間にあるため朝晩はものすごく冷える。あまりの寒さに顔をしかめた時、冷たい風に乗って梅花の香りがふわっと漂ってきた。

途端、頬の筋肉が緩んでいく。

この匂いをいつまでも嗅いでおきたいと思いつつ、詩乃は梅林を隔てた離れへ続く回廊を急ぎ足で進む。

数分後には離れに到着した。

「こんな素敵な離れなのに、今は誰も泊まらないなんて勿体ない」

母屋の荘厳さとは異なり、隠れ家的な洋風ログハウス。

軒がテラスまで覆うカバードテラス、陽光を取り入れるために作られた大きな窓、そして屋根裏部屋の造りなどは、どれも素敵だ。

詩乃はうつとりしながら階段を上がり、管理システムにカードキーを触れ合わせて鍵を開けた。室内に入った数秒後、玄関に照明が灯り、小さな警告音が鳴り響く。数十秒以内に暗証番号を打ち込まなければ電子ロックがかかり、セキュリティ会社に通報される仕組みになっていた。

そうなる前に、早く暗証番号を打ち込まないと……

急いで解除しようとした時、部屋の奥で床を踏み締めるような小さな音がした。

何気なく視線をそちらに移した瞬間、詩乃の目に上半身裸の男性が飛び込んできた。

驚愕のあまり、心臓が一瞬止まりそうになる。同時に手の力が抜け、カードキーがずりりと足元に落ちた。それを拾えないほど、男性から目を逸らせない。

水泳選手のように見事な肉体美を持つ男性は、気怠げな様子で腕を組み、大きな柱に凭れていた。にもかかわらず、詩乃に向ける眼光は鋭く、それだけで空気がピリピリする。

叫んで牽制しなければならぬのに、舌が喉の奥に引っ付いて声が出ない。

しかし、この状況で不利なのは詩乃ではなく、勝手に離れに侵入し、衣服を脱いでリラックスしている目の前の男性だ。

詩乃は渴いた口腔をなんとか唾で潤し、声を振り絞った。

「あなた、誰!？」

「それを君が言うのか？」

静寂な空気を破る深い声音に、背筋がぞくぞくする。それを振り払いたくて、詩乃は身体の脇で握り拳を作り、顎を上げた。

「ど、泥棒のくせに、いい度胸ね。わたしには訊ねる権利が——」

凄みを利かせて反論しようとする詩乃に、男性がゆっくり片手を上げた。

「何!？」

詩乃は乱暴でもされるかと思ひ、反射的に足を後ろに引く。

けれども男性は何もせず、ただ天井を指しただけだった。その意味がわからず、指先を追って吹き抜けのそこに目を向ける。

しかし、変わったところはない。

「わからないのか？」

「えっ?」

そう問いかけるや否や、部屋中に警報音が鳴り響き、赤いランプが点滅し始めた。その間隔がどんどん狭まっていく。

警告アラームだとわかった途端、男性が伝えたかった内容を悟る。

「セキュリティ！」

詩乃はすぐさまパネルと向かい合うが、既に遅かった。

このままではセキュリティ会社から母屋に緊急連絡が入り、眠っている皆を起こしてしまう!

パニックになる詩乃を尻目に、男性が動き出した。彼は慣れた様子で固定電話の受話器を取り上げ、どこかへ連絡する。

「すみません、私は国安遥斗と申し——」

「国安遥斗!？」

驚きのあまり叫ぶ詩乃を、男性がじろりと睨む。

詩乃は慌てて口を閉じて大人しくするも、男性をこっそり窺わずにはいられなかった。

泥棒だと思っていた男性——遥斗は、どうやらセキュリティ会社に連絡しているようだ。暗証番号を打てなかった事情などを説明するのが聞こえる。

そんな遥斗を見ながら、詩乃は頭を抱えなくなった。

国安会長のデスクには家族写真が飾られており、詩乃も目にしてた。

どうして、遥斗の顔をすぐに思い出さなかったのか。詩乃が国安会長の懐に飛び込まざるを得なかった元凶御曹司、国安遥斗の姿も見ていたのに……

家族写真から、遥斗がモデルみたいに恰好いいのは認識していた。でもまさか、これほどは思っていないかった。退廃的な雰囲気は漂わせていても、その姿に目が引き寄せられるのを止められない。

現在は二十八歳の遥斗は、リバーショートの髪にパーマをかけている。ゆうに一八〇センチを超すほど背が高く、体格も引き締まって見事だ。

キリツとした目、真っすぐな鼻梁。そして薄い唇を持つ遥斗は一見冷酷な感じにも見える。一方

で、ほんの僅か唇の端が上がるだけで印象が和らぎ、優しい男性へと変貌する。

今まさにそうだった。深刻そうに話しつつも、相手の話の途中でふっと唇が緩むと、周囲の気温が上昇したように感じる。

この人が、国安会長が期待する孫であり、詩乃が結婚するかもしれない御曹司。

ウェディングドレスをまとった自分が遥斗の隣に立つのを想像してしまい、一瞬にして鳥肌が立った。詩乃は堪らず我が身に腕を回し、何度もそこを擦る。

「では、それをお願いします」

そう言って通話を終わらせた直後、今度は別の部屋で違う呼び出し音が響いた。

遥斗は詩乃に一瞥もくれず、奥へと歩いていく。

「ちよっ、待って……!」

遥斗を追うが、彼がマスターベッドルームに消えたため途中で尻込みしてしまった。

詩乃はフィアンセ候補の一人。自分から彼のプライベート空間に足を踏み入れるのは止めるべきだ。

親密になりたいのではなく、関わりたくないと思っているのだから……

しかし、今は緊急事態。まずは、それを解決する方が大事だと思い直す。

とはいえ、国安会長の秘書としての立場を忘れてはならない。一線を越えないように気を付けて、ドアの直前で立ち止まった詩乃は、そこから室内を覗いた。

「国安、さん？」

途端、暖かな空気がふわっと流れてきた。

部屋に置かれた暖炉を見ると、そこでは火が踊り、薪が爆ぜていた。

ああ、冷えた身体を温めたい——そんな風に思う詩乃の前で、遥斗がキングサイズのベッドからスマートフォンを拾い上げる。

「もしもし。……はい、私です。そちらに届け出ているデータの確認が取れて良かった。……ええ、この時間ですから母屋への連絡は遠慮していただけますか？」

再びセキュリティ会社と話しているみたいだ。本来なら母屋へ確認の連絡が入るが、時間が時間なため、遥斗の権限で止めている。

すぐにセキュリティ会社に身分照会を求めるとは、なんて頭の回転が早いのだろうか。

もしかして、こういう経験が昔あったとか？

詩乃がそんな風に考えていた時、今まで鳴り響いていた警報音が消える。

「今、消えました。お手数をおかけして申し訳ありません。……はい、それでは失礼します」

遥斗はそう告げると電話を切り、スマートフォンをベッドに放り投げた。

その音にハッと顔を上げると、ゆっくり振り返った遥斗に鋭い目つきで射貫かれる。

「さて、俺の眼りを妨げ、いらぬ厄介ごとを負わせたお前は誰だ？」

威圧的な態度に気後れしそうになるも、詩乃は国安会長の個人秘書として従順に頭を下げた。

「この度はご迷惑をおかけしてしまい、大変申し訳ございませんでした。わたしは国安会長の個人秘書、大峯詩乃と申します」

「祖父の個人秘書？ 君が？」

「はい」

素直に頷く詩乃を観察しながら、遥斗がベッドに腰掛けた。

「俺の知らない、祖父の個人秘書ね……」

「一年前に採用されてこちらでお世話になっていますが、その間にお孫さんの国安さん……えっと、遥斗さんとはお会いしたことがないので当然だと思います」

「ふーん。それで、祖父の個人秘書が離れて来た理由は？ しかもそんな恰好で。もしかして、スタッフの誰かと密会するために、この建物を使っていたのか？」

「密会?！」

想像すらしなかった言葉に、詩乃は哑然とする。

いったい同僚の誰とここで密会するというのか。

詩乃はバカバカしいとせせら笑う。しかし、すぐに態度を改めるように背筋を伸ばした。

「明日の朝に必要な書類が、こちらに置いてあるんです。それを持ってくるようにと、国安会長の指示を受けました。もし遥斗さんが滞在していると伺っていれば、夜にお邪魔する真似は決してしませんでした。本当に申し訳ございません。書類を引き取り次第、失礼いたします」

「どこへ行くと言うんだ？」

呆れ気味に言い放った遥斗は、気怠い仕草で乱れた髪を掻き上げた。

「スタッフなら、セキュリティの仕組みを知っているはずだ。一度ロックされれば、離れにいる人

物では解除ができない。母屋にいる誰かに頼むしかない」と

遥斗の言うとおり、母屋の誰かにパスワードを打ち込んでもらわない限り、電子ロックは解除されない。

もし泥棒と遭遇して閉じ込められた場合は、別の部屋に逃げ込んでロックをかけ、セキュリティ会社か警察を呼べばいい。そうすることで、契約者を介さなくても安全に脱出できる。

しかし普通にセキュリティの解除に失敗した時に開けられるのは、契約者の承諾を得たセキュリティ会社か、パスワードを知る母屋のスタッフたちのみだ。

結局のところ、頼めるのはスタッフだけになる。就寝中の彼らを起こしたくないが、この非常事態を知らばきつと許してくれるに違いない。

「はい。ですので、同僚に連絡をします。解除をしてもらい——」

そう言つて、ポケットを探る。しかし、そこにあるはずのものがなかった。

嘘、……スマートフォンがない！

詩乃はポケットを叩いてはあたふたと視線を彷徨わせ、記憶をたどり始めた。

そこで、身分証だけをポケットに入れて、自室を出たのを思い出す。

「わたし、いったい何をやってるの？」

詩乃は小声で自分を叱咤し、唇を噛んだ。

「スマホがないと、やっと気付いたか」

「えっ？ やつと気付いたって……どうしてわかったんですか？」

目を見開く詩乃に、遥斗はそれぐらいわからないのかと言わんばかりに鼻を鳴らした。

「ポケットにスマホを入れていれば、重みで生地が引つ張られるはず。なのに、そういう風には見えなかったからな。それでどうする？ 母屋に電話をかけて、祖父も含めた皆を叩き起こすのか？」

詩乃は静かに頭を振った。

離れにある固定電話機には母屋の代表番号が登録されているので、誰かを起こすのは可能だ。でもそうすれば、母屋中にコール音が響き渡り、国家安全会長の眠りまで妨げる可能性がある。

自分の失態で雇い主の睡眠を削るなど、言語道断だ。

ならばどうしようかと考えていると、痺れを切らしたかのように、遥斗がため息を吐く。

「では、どうする？」

遥斗に訊ねられ、詩乃は視線を逸らした。

「どうするって……あっ！」

あることを思い出し、遥斗に顔を向けた。

「遥斗さんのスマートフォンを貸していただけませんか？ ここで働くスタッフの一人ぐらいは、

番号を入れてますよね？」

「ああ、一人だけ入れてある。……須田顧問の番号ならな」

そう言われて、詩乃の望みは崩れ去った。

須田顧問は住み込みではなく通いなので無理だ。それに、そもそも自分の失態で年配の男性を未明に起こすなんて問題外。

結局のところ、陽が昇るまでここに留まる他ない。

つまり、詩乃は遥斗と二人きりで一夜を過ごす……

その事実が脳に浸透していくにつれて、詩乃の顔から血の気が引いていった。

よりにもよって、一番一緒にいたくない人物とだなんて！

緊張と不安で、自然と身震いが起こる。それを抑えるために身体に力を入れ、両手をぎゅっと握り締めた。

「お休みのところ、本当に申し訳ございませんでした。……あの、遥斗さんにはご迷惑をおかけしませんので、明け方までこちらにいさせてくださいませんか？ スタッフたちが動き出す頃にロックを解除してもらいますので」

「そうするしかないな。じゃ、もう寝よう。車を走らせてきたせいで疲れてるんだ」

遥斗がベッドに横になるのを見て、詩乃はくるっと身を翻した。

「失礼します！」

「どこへ行く？ 二階の客室か？」

遥斗に声をかけられて、詩乃は一步足を踏み出したところで、動きをぴたりと止めた。

「いいえ。二階もロックされてしまったので、リビングルームのソファをお借りします」

「リビングルーム？ そんなところへ行かず、ここで寝たらいい」

「……」

恐る恐る振り返る詩乃に、遥斗がベッドの隣を叩いた。

「ベッドは広いんだ。大人三人でも横になれる」

「いいえ！ ……わたしは遠慮いたします」

「風邪をひいてもいいの？」

「どうぞご心配なく。身体は丈夫なので……。おやすみなさい」

詩乃は国家安全長に接する時と同じく慎重しやかに答え、ドアを閉めた。

途端、冷気が肌に刺さってぶるっと震える。

「寒い！」

暖炉で温められた部屋に入りたい気もするが、そこに一步足を踏み入れたら遥斗と同じベッドで寝ることになってしまう。

そんなのは、絶対にお断りだ。

あと数時間も経てば、スタッフたちが起き出す。それまで耐えればいい。

詩乃は寒さを凌ぐため、ソファにあるクッションを一ヶ所に掻き集めて簡易ベッドを作ると、そこに潜り込んだ。

だが、一向に身体が温まる気配はなかった。

仕方なく下肢を擦り合わせたり、冷たい手に息を吐きかけたりして暖を取ろうとするが、そうすればするほど身体が冷えていく。

目を瞑って辛抱しようにも、気温が下がるにつれて空咳が出始めた。

こんな状態で眠れるわけがない。

「早く時間が過ぎて、朝になって」

そう呟いた瞬間、ドアが開く音が響いた。

遥斗が洗面所へ行くのかと思いきや、足音はどんどん大きくなり何故かこちらに近づいてくる。足音が背後で止まるものの、遥斗は何も言わない。ただ、詩乃の顔を見入っているのがなんとなく肌で感じられた。

しばらく眠ったフリをして我慢していたが、見られている間隔が長くなればなるほど、瞼がびくびくし出す。

お願い、早く部屋に戻って！——そう心の中で祈った時、背後で大きなため息が聞こえた。

「つたく、意地っ張りな秘書だな」

刹那、詩乃の身体がふわっと浮き上がった。頭が揺れて、眩暈に似た症状に襲われる。

「きゃっ！」

「ほら、起きてる」

詩乃は何度も瞬きをして、間近に迫る遥斗に目を凝らした。彼の吐息が頬に当たる距離に戸惑うものの、彼の体温を感じるだけでどんどん思考が鈍り始めた。さらに身体の芯がふにやふにやになっっていく。

温もりに包まれるのが、これほど心地いいものかと思うほどに……

けれども、相手は遥斗。こんな風に心を許してはいけない。

「あの、遥斗さん」

遥斗に声をかけた時、暖かな空気を感じてハッとなる。彼は、マスターベッドルームに詩乃を連れて来たのだ。

詩乃は、戸惑いながら遥斗の肩を軽く叩く。

「下ろしてくだ——」

「ああ、下ろしてあげよう」

そう言って詩乃を座らせた場所は、シートが乱れたベッドだった。

詩乃は慌てて下りようとするが、そうする前に遥斗に背後から抱きつかれてしまう。

「何を！」

遥斗を手で押しのけるものの、彼はあろうことか詩乃が身に着けた綿入りガウンの紐を解いた。

「ちよっ……やめて！」

拒む間もなく簡単に脱がされ、身体のラインが露わになるネグリジェ姿にされてしまった。

途端、背後にいる遥斗が息を呑んで動きを止める。

恐々と振り返ると、遥斗の視線が詩乃の胸元に落ちていた。ネグリジェのパイル地がたるみ、乳房が覗いているではないか。

恥ずかしさのあまり、詩乃の顔が一気に熱くなる。

「離してください！」

詩乃は生地を掴んで胸元を隠し、ベッドを下りようとした。ところが先に素早く動いた遥斗の腕が腰に回され、無理やりベッドに押し倒される。

「は、遥斗さん！」

詩乃が必死に手足をばたつかせるが、遥斗はものともしない。それどころか、彼は片脚で詩乃の下肢を挟んで押さえ込む。

「ちよっ、何をやるんですか！」

「最初からここで寝ればいいものを……。君が咳をするたびに、俺が眠れなくなる」

「わたしの咳がここまで聞こえて？」

「ああ。そのせいで、俺も眠れなくなっただぞ」

「すみません……」

素直に謝るも、詩乃の心中はここで譲歩したくないという思いでいっぱいだった。

誰が好んで雇い主の孫とベッドに入るといえるのか。しかも相手は、詩乃がここに乗り込む羽目になった元凶御曹司。

特殊な事情があるため、尚更遥斗の言いなりにはなれないというのに……

だからこそ、詩乃はなんとかして遥斗の腕の中から逃げようと、もう一度お願いすることにした。ほんの僅か首を回して背後の遥斗を窺う。

「遥斗さん。やっぱりベッドではなく、そのカーペットの上で寝ます」

「ここで寝ろ。俺を煩わせるな」

「ですが、わたしは会長の秘書で、遥斗さんはお孫さんです。こういう状況は許されません」

「静かに。俺を煩るな。……本当に眠いんだ」

「であれば、わたしがいない方がよく眠れますよね？ さっさとベッドを下り——」

「詩乃。俺の我慢が利かなくなつて君を襲う前に、早く寝ろ！」

まるで地を震わせるような冷たい声に、詩乃は瞬時に遥斗の腕の中で縮こまった。

「はい、寝ます」

小声で囁き、慌てて目をぎゅうっと閉じる。

遥斗がどこまで本気なのか見当もつかないが、その声音からは詩乃への興味は感じない。ただ、苛立ちを露わにしている今は、逆らわないのが一番いいとわかっていた。

それだけでなく遥斗は眠りを妨げられて、機嫌が悪いのだから……

詩乃は上掛けを握り、音を立てないように気を付けて引つ張り上げる。そこに顔を埋めて耐えるも、急に空咳が込み上げた。

「……ゴホッ」

直後、腹部に回された遥斗の手に力が込められて、詩乃は目を見開いた。

「寝るんだ」

こんな状況でわたしが眠れるとでも？ ——そう言いたいのが、口に出せばまた遥斗の怒りを煽る羽目になる。詩乃は返事をする代わりに顔き、唇を強く引き結んで瞼を閉じる。

そうしてしばらくじっとしていると、強張っていた身体から次第に力が抜けていく。遥斗の温もりに包まれたせいなのか、それとも薪の爆ぜる音に心が休まったせいなのか。

知らぬ間に呼吸のリズムも平常に戻り、いつしか詩乃は深い眠りに落ちていったのだった。

梅林の方から聞こえる、鳥のさえずり。

心地いい鳴き声に揺り動かされて、詩乃は静かに眠りから覚めた。

「うーん」

早く起きて、仕事に行く準備をしなければ——そう思った時、何かがおかしいと気付く。

いつもなら簡単に動く身体が、今日に限って寝返りを打てない。何かが身体に押し掛かっていた。

しかも、リズムカルな風が頬をくすぐる。それらは全て、普段なら決して感じないものだ。

自分の身に起こっていることを確認しようと、詩乃は重たい瞼を押し開けた。

寝起きなのもあって焦点が定まらないものの、それでも必死に目を凝らす。すると、眠っている

男性の顔が真正面に飛び込んできた。

えっ、男性？ この人いったい……誰!?

驚愕のあまり悲鳴を上げそうになるが、その男性が誰なのかわかるなり、出かかった声を呑み込んだ。

「うーん……」

詩乃が起きたと察したのか、遥斗が呻いて眉間に皺を寄せる。けれども、再び寝息を立て始めた。

詩乃は詰めていた息を吐き、静かに遥斗の腕の中から抜け出す。

着てきたガウンを拾い上げ、遥斗を起こさないように抜き足差し足でマスターベッドルームを出た。リビングルームで立ち止まり、肩越しに振り返る。

遥斗が起きて追ってくる様子はないかと耳を澄ましたが、その気配はなかった。

「良かった!」

詩乃はホッと胸を撫で下ろす。しかし、遥斗に抱かれて眠ってしまった経緯を思い出し、頭を抱えたくなった。

どうして気を抜いてしまったのだろうか。

しかし、その理由を考える時間はない。早くここから出なければ……

自分を立て直した詩乃は、ガウンを羽織って電話機が置いてある場所へ移動した。

まずそこにあるメモ用紙を使い、遥斗へ「昨夜はご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。

お疲れのご様子なので、ごゆっくりお過ごしください。お先に失礼いたします」と書き残す。そして、彼がリビングルームへ入った時に一番目につきやすいと思われるテーブルの上に、それを置いて。

続いて、セキュリティロックを解除してもらうため、母屋に電話をかけようとする。

その時、偶然にも呼び出し音が鳴った。

コール音が一回鳴り終わらないうちに、受話器を取り上げる。

「もしもし」

『もしかして、大峯さん?』

聞こえてきたのは、野太い男性の声。スタッフを統括する宮崎の声だ。

「はい、大峯です。わたしも今、母屋に電話をかけようと思っていたところだったんです」
喜びを隠し切れないせいで早口になり、声が大きくなる。でも遙斗の存在が頭を過り、途中から声量を落とす。

『良かった！ デスクの上に置かれたメモと、戻っていないカードキーを見ておかしいなど思ったんだ。やっぱり離れに閉じ込められてたんだね。すぐに僕に連絡してくれば、ロックを解除できたのに。そういうえば、セキュリティ会社から母屋に連絡がなかったな……』
遙斗がセキュリティ会社に連絡してくれたおかげだ。

けれどもそれを説明すれば、遙斗と一夜を過ごした件が露見してしまう。

詩乃は、ひとまずロックの解除をお願いして受話器を下ろした。十数秒後に警告音が鳴り響き、急いで暗証番号を打ち込んでロックを解除する。

あとは、資料を取るだけ……

書棚にある目的のファイルを探すと、早々に離れを飛び出した。

詩乃は朝の清々しい空気を吸い、燦々と輝く太陽の陽射しを一身に浴びる。まるで閉じ込められた洞窟を抜け出したような、そんな幸せな気持ちに包まれた。

しかし、その場で立ち止まっている余裕はない。

詩乃は昨夜来た道を走り、自室へ戻った。

簡単にシャワーを浴び、身なりを整えていく。

昨日と似たような服装だが、シックに見えるようにグレーチェックのミディ丈スカートと黒色の

セーターを組み合わせ、パールのアクセサリーで飾った。緩やかに巻いた髪は、いつもと変わらずハーフボニーテールにする。

鏡に映し出されたのは、綿入りのガウンを身に着けた不恰好な女性ではなく、人前に出て大丈夫な女性の姿。

これで遙斗さんの記憶から、ベッドにいたわたしの姿が掻き消えますように——と祈りながら、詩乃は自室を出た。

シエフ、家政婦頭、その他のスタッフたちとすれ違うたびに挨拶し、東側に面した日当たりのいい書斎へ向かう。そしてドアをノックして「大峯です」と伝えた。

「入りなさい」

「失礼いたします」

詩乃は書斎に入り、アンティークの大型デスクで仕事をする国安会長の傍に立つ。

「おはようございます。昨夜、ご連絡いただいた資料です」

国安会長の前に置き、素敵な雇い主をそつと窺った。

当然ながら若い頃の姿は知らない。でも温和な目元、笑い皺、相手の心を和ませる話し方などから、いろいろな女性にモテていたことが窺える。

ここに就職したのは必要に駆られてだったが、今ではこの仕事を楽しんでいる。スタッフたちの雰囲気もいい。

詩乃は口元を緩めて、今日のスケジュールを説明し始める。

「午後ですが、十四時には役場の地域担当者が来られ、十六時からは本社で定例会議が行われます。その後、佐久野ワイナリーの佐久野社長と会食になります」

「今夜のレストランはどこかな？」

「地産地消を売りとする、フレンチレストラン『ベイジープレ』です」

「ああ、あそこか！ いいね……。先方に、もう一席増やすよう伝えてくれるかな？」

「承知いたしました。本日のスケジュールは以上になります」

縮めの言葉を告げた詩乃に、国安会長がデスクの上にあるファイルを差し出す。午前中に、国安会長が手を入れた資料をチェックしろという意味だ。

詩乃がそれを受け取って顔を上げると、国安会長は楽しげな様子で片眉を上げた。

「スケジュールはね。……他にも伝える件があるだろう？ 離れて起こった件だよ」

詩乃は内心ドキッとすることもそれを表には出さず、国安会長と目を合わせる。

こちらを見る国安会長の瞳は加齢もあってやや濁っているが、力強さや好奇心の輝きは失われていない。

こういう風に元気旺盛なところが、好きなのだ。

「相変わらずよくご存知ですね」

「そうでなければ、会長職など務まらない。隠居の身でありながら、本社の内情を知る手立てもあるのに、この敷地内で起きたことに気付かないわけがない」

得意げに鼻を鳴らして恰好をつける国安会長の仕草がおかしくて、詩乃は頬を緩めた。

多分、宮崎がセキュリティの件を国安会長に報告したのだろう。スタッフたちは、どんな些細な出来事であっても、雇い主への報告を怠らないからだ。

「会長が面白い話ではありませんよ。昨夜ファイルの件で連絡を受けたあと、朝まで待てずに離れに行っただけです。でもセキュリティの罠にはまってしまい、それで今朝宮崎さんに対応いただきました」

詩乃の説明に国安会長は豪快に笑い、デスクに肘を突いて顔を覗き込んできた。

「詩乃らしい……。ざっくりとした説明だね。必要な箇所が抜けてるぞ」

国安会長が大型の箱でも持つような手の形を作り、そこからここまでの部分なと示す。

まさしくそれは、詩乃が打ち明けていない時間帯だ。

「会長。そこは私的な部分ですので――」

「だったら俺が話そう」

瞬間、背後から深い声が響き、詩乃の心臓が勢いよく跳ね上がる。慌てて振り返ると、そこにはほんの数時間前にやり合った遙斗が立っていた。

母屋を訪れるのはわかっていたが、まさかこんなにも早く起きて来るなんて……

ダークスーツにストライプのネクタイを締めた遙斗の姿を、詩乃はまじまじと眺める。

初めて会った時の退廃的な雰囲気とは一変、身なりを整えた遙斗の佇まいは凛としていた。男性的な色香と、孤高の男らしさが滲み出ている。

そういう遙斗に惹かれる女性は、きっと多いに違いない。

それぐらい詩乃にもわかる。

遥斗には、フィアンセ候補など不要だというもの……

「どれだけ観察したら気が済むんだ？」

低音の声で凄まじく、詩乃は我に返る。

秘書らしからぬ不作法さを注意された気がして、一気に頬が上気していった。でも遥斗の言葉で、彼も同じく詩乃を見つめていたとわかる。

自分だって会長の個人秘書を見定めていたくせに——と、近寄ってきた遥斗に目を向けると、彼が「何が言いたい？」と言わんばかりに片眉を上げた。

途端、国安会長が楽しげに笑い始める。

「たった一夜を共にしただけで、そんなに仲良くなったのか」

詩乃は何事もなかったかのように身を翻し、国安会長にっこり微笑んだ。

「会長、誤解です。お孫さんとは何もありません」

「そうですね、お祖父さん。会長の秘書にまで手を出す孫だと思わないでください。迷惑をかけたのは俺なんですよ」

「ほう？ ……どんな迷惑を？」

国安会長が、急に興味津々な声音で目を輝かせる。その様子にハラハラする詩乃の横で、遥斗が大げさに嘆息した。

「散々でしたよ。昨夜は会合を終えたその足で車を走らせて疲れていたというのに、離れに鳴り響

く警報音で眠りを妨げられたんです。しかも、セキュリティのロックがかかって閉じ込められる羽目に。その結果、彼女に俺のベッドの隣を奪われて……」

奪われる!?

詩乃は血相を変えて、国安会長に真実とは違うと伝えるように頭を振るが、彼はただ目を細めるだけだ。

「お祖父さん、孫が離れにいと秘書に伝えていなかったんですか？」

「そんなに怒るな。まさか、詩乃が夜中に離れに行くとは思っていないくてな」

国安会長の言葉に、遥斗が詩乃に視線を移す。

やはり勝手に行動を起こした詩乃のせいだったのか——そう言わんばかりに、片眉を上げる。

詩乃は言い返したくなるも、静かに口を閉じて目線を落とした。

何故なら遥斗の考えが正しいからだ。今回の件は、事前に準備をしようと思って勝手に動いた詩乃の責任としか言いようがない。

神妙な顔で控えていると、遥斗が小さく息を吐いた。

「そうやって秘書を親しげに呼ぶせいで、規律が乱れるんです。秘書も……会長に向かって公私の区別がつかないようですし」

「遥斗。ここでは私のやり方こそが全てだ。お前が口を出す話じゃない」

国安会長がびしゃりと言い放つと、遥斗が即座に「申し訳ありませんでした」と折れる。

「お前も知つてのとおり、別荘のスタッフは皆家族も同然だ。親しくするのは、詩乃に限ったこと

ではない」

「……わかつております」

「ならいい。お前にも大切にしてほしいからな。私のために働くスタッフたちを」

何やら家族間の話に進みそうな気配を感じて、詩乃は会釈えしやくだけしてその場を去ろうとした。

「それにしても、詩乃と仲良くなってくれて本当に嬉しい。今日お前を呼んだのは、その詩乃に
関係してるんだ」

突然自分の名前を出されて、詩乃は足を止める。

「実は、お前の個人秘書として詩乃を託したい」

「はい!？」

遥斗が困惑した声を上げる。その横で、詩乃は口をぽかんと開けて絶句した。

わたしが遥斗さんの個人秘書に？ 近寄りたくもない人の傍で働けど？ そ、そんな——と狼狽ろうた
えていると、国安会長が詩乃を安心させるように目を細めた。

「もちろん、永久に……というわけではない。夏が終わる頃にはこちらに戻してもらおう。遥斗のと
ころに行かせるのは、詩乃にホテル事業を勉強させるためだ」

「勉強なら、会長のところで充分では？ 俺には優秀なアシスタントの岩井いわいがいますので、個人秘
書など不要です」

「わかつてる、岩井くんが優秀だということは。だからこそ、詩乃を遥斗の手に委ねるんだ。岩井
くんみたいに、私の下で動いてもらうためにな」

「ですが——」

「これは決定事項だ」

ぴしゃりと言い渡されて、遥斗が口を閉じる。しばらく俯うつむいていたが、詩乃に何か言えとばかり
に目で合図を送ってきた。

「あの……」

詩乃は狼狽ろうたえつつ、国安会長に呼びかけた。

「わたしは会長のお傍で働きたいです」

「詩乃、私が遥斗の個人秘書になれと命じたのは勉強させるため。だが、もう一つ頼みがある。遥
斗にはフィアンセ候補が数人いるが、彼女たちが孫に相応ふさわしいかどうか見極めてきてほしい」

「お祖父さん……、秘書に私的な頼みごとはほしないでください。それに、以前から彼女たちには興
味がないと言っているでしょう？」

遥斗が呆れたように言い返す。それに対して国安会長が何かを言う間、詩乃は国安会長の申し出
を考えていた。

もしかしたら、フィアンセ候補を見極めている最中に、彼女たちの誰かを遥斗に推せるのではな
いだろうか。上手くいけば、当初の目的を達成できるかもしれない。

だがそんな振る舞いをしたとバレたら、国安会長の怒りを買う恐れもある。結果、詩乃の策略で
選んだ女性など許さん！ 他の候補者を選ぶんだ」と言われたら、元も子もない。

国安会長の案はそえられるが、ここは下手に動くより、一番発言力のある会長の傍でフィアンセ

候補を推す方が断然いいのではないだろうか。

詩乃がどうしたものかと思案していた時、何やらコツンコツンと規則正しく響く音が聞こえた。気になって顔を上げると、国安会長が手元のファイルを押いていた。

いつまで経っても返事をしない詩乃に痺れを切らしたのだろう。

「申し訳——」

すぐさま謝ろうとするが、国安会長が小さく首を横に振ったのを見て、慌てて口を閉じる。どうやら怒っているのではなさそう。

詩乃は不思議に思いながら国安会長が意味深にデスクとファイルを交互に叩くのを見て、ふと彼から渡されたファイルに視線を落とした。

もしかして、これを見ると合図を送っているとか？

ちらつと窺うと、国安会長がどうぞとばかりに片眉を上げた。

詩乃は促されるままファイルを開ける。そこに挟まれたメモが何を意味するのかわかるや否や、大きく息を呑み、面を上げた。

「どうだ？ 遥斗の個人秘書になり、フィアンセ候補たちを見極めてくれるか？」

「行きます！」

「はあ!？」

詩乃が承諾したことに、遥斗が「お前正気か!？」と言わんばかりに詩乃を凝視する。だが、急に考えを変えた理由が手元のファイルにあると察したのか、覗き込もうとしてきた。

それに気付いた詩乃は、慌てて背後にファイルを隠す。すると、遥斗が訝しげに目を眇めた。

そんな二人の間に漂う不穏な空気を払うように、国安会長が咳払いした。

「これで詩乃の了承も得た。遥斗、異議は？」

祖父でもある国安会長には逆らえないのか、遥斗がしぶしぶ頷く。

「ありません。彼女を俺の傍に置き、ホテル事業の勉強をさせます。但し、フィアンセ云々の件はなかったことにしてもらいます。本当に必要ありませんから」

「遥斗、いつまでも逃げていては先方にも失礼だ。詩乃には私の目となって見極めてもらう。そう、詩乃は本社に預けるがあくまで出向という形を取る」

そうするのは、本社の事務作業の負担を減らすためだろう。だが、遥斗はまだ納得がいかないようだ。

しかしこれ以上口答えをしようとはせず、国安会長の言葉を受け入れる。

「よし、この話はこれで終わりだ。二人とも朝食を取っておいで。私は須田くんに連絡を入れてから、そっちへ行く」

「では、失礼いたします」

遥斗が挨拶するのを横目で見て詩乃も黙礼し、彼に続いて部屋を出た。ドアを閉めるや否や、彼が詩乃の正面に立ち塞がった。

「理由を聞かせてもらおうか。最初、君は乗り気ではなかった。なのに手にあるファイルを見た途端、考えを変えた。何故？ ……それを俺に見せるんだ」

遥斗がファイルを奪おうと距離を縮めてくる。それを避けるため、詩乃は少しずつ下がった。「な、何もありませんよ。わたしはただ……きゃっ！」

背中に壁が当たると同時に、遥斗がそこに手を置いた。彼の態度に、詩乃は目を白黒させて反対側へ逃げようとする。しかし、遥斗は上体を傾けてその退路さえも塞いだ。

遥斗の吐息が頬をかすめるぐらいの至近距離に、詩乃の心臓が早鐘を打ち始める。恐れと緊張、そして理由の付けられない不安にどんどん心が搦め捕られてしまう。

「俺のところに来るんだらう？ 隠し事をされるのは嫌いなんだ」

甘く囁くように言いながらも、遥斗の目は笑っていない。

突然のことに詩乃が動けずにいると、遥斗がその隙を狙ってファイルに触れた。奪おうとする力が手に伝わった時、いきなりドアが開いて国安全長が現れる。

詩乃たちを見るなり顔をしかめた国安全長を見て、遥斗は決まり悪げに素早く下がった。

「転びそうになった彼女を支えただけです」

訊ねられてもいないのに、平然とした態度で説明する遥斗に、国安全長が苦笑いする。

「まあ、なんにせよ……親しくなったのはいいことだ。遥斗、一緒に朝食を取りに行こう」

「……はい」

素直に返事をするが、遥斗は「これで終わったと思うな。必ず理由を突き止めてみせる」と言うように詩乃を射貫いて、国安全長のあとに続く。

その場で二人を見送った詩乃は、一人になると壁に凭れて脱力した。

「良かった……」

実は国安全長から渡されたファイルには、遥斗のフィアンセ候補の情報が挟まれていた。

もちろんそれは遥斗に見られても構わないが、その一番上に「結婚の意思のない孫をその気にさせること。他の候補者を早く自由にしてあげるために」という付箋が貼られていた。

国安全長が詩乃だけに伝えたということは、それは秘密の指示だからに違いない。だから、詩乃は遥斗に見られないよう必死に隠したのだった。

それにしても、なんという指示だろうか。読んだ瞬間面食らったが、これで当初の目的が果たせると悟った。

国安全長のおかげで、思う存分他の候補たちを彼に薦められる！ 本人がフィアンセ候補の誰かを気に入れば、わたしは自由に——そう思えば思うほど喜びを隠し切れず、自然と頬が緩む。

資料に書かれた名前は三名。詩乃は、候補の中でも三番手という立ち位置だ。だったら、候補の一番手と二番手を薦めるのは道理にかなっている。

「期限は夏までね……」

そう呟くも、不意に詩乃を雁字搦めにするような遥斗の野性的な瞳が頭を過り、身体が震えた。

堪らず片手で喉元に触れ、激しく脈打つそこをなだめる。

理由のわからない自分の反応に戸惑うも、詩乃は込み上げてくる不安を吹き飛ばすように歩き出したのだった。

長野から東京へ出てきて、約三週間が経った。

その間、詩乃は研修を受けていたため、内部統制部部长の遥斗とは会っていない。しかし、彼のアシスタントの岩井裕也とは、頻繁に顔を合わせた。

遥斗の個人秘書として岩井と一緒に仕事をするためだが、その研修もようやく今日で終わった。午後から遥斗の傍で働く日々が始まる。

「ここで働くのは八月末まで。早く動かないと……」

遥斗の執務室とはドア一枚で繋がっているこのアシスタント室で、詩乃は待機を命じられている。大人しく自分の席に座っていたが、いつしか執務室へ続くドアに目が吸い寄せられた。

現在、執務室では遥斗と岩井が話している。いったい何を話しているのだろうか。

暇を持て余した詩乃は、とうとう引き出しからあのファイルを取り出した。

それは、国安会長から受け取ったフィアンセ候補の情報が載った資料だ。顔写真は添付されていないが、彼女たちが何故候補になったのか詳細に書かれている。

当然ながら詩乃の情報もあり、学歴や趣味、そして現在実家を出て行方不明中という件も明記されていた。

つまりフィアンセ候補の情報は、全て正しいという意味だ。

「最有力候補は、二十四歳の鈴木明里さんね……」

鈴木は鈴木製茶株式会社の社長令嬢で、取引先の倒産で会社が廃業寸前にまで陥ったようだが、しかしKUNIIYASURIZOトホテルが毎年茶葉を買い上げることで、会社を救ったとある。

億を超える取引額がもたらしたのは、KUNIIYASURIZOトホテルの発展。しかも海外の茶葉人気に伴い、ホテルは莫大な利益を得られるようになったらしい。

国安会長と出会って経営破綻を免れたというのは、詩乃の実家と似たり寄ったりの流れだ。しかし、西條家が鈴木家のように恩を返せたのかと言えば、残念ながら足元にも及ばない。でも西條家には、鈴木家にはないものがある。

それは、慶応元年から続く老舗呉服屋という看板だ。

歴史ある呉服屋の着物を扱っているホテルとして、海外の富裕層から満足の声が上がっているらしい。

利益面では到底鈴木家には敵わないが、質を高める役割を担った西條家もそこそこKUNIIYASURIZOトホテルを助けている。今では取引先として胸を張れるまで持ち直した。

そんな鈴木家や西條家とは違うもう一人の候補者が、二十九歳の伊沢麗子だった。

伊沢はフードコーディネーターとしてメディアにも露出しているかなりの有名人で、彼女の父親はKUNIIYASURIZOトホテル「蒼」の総料理長を務めている。

ハイクラスのホテルとして有名で、海外からの富裕層の旅行者も多かった。しかも創作日本料理

が絶品で、国内外問わず幾度となく取材が入っている。

その総料理長が、フィアンセ候補二番手の父親なのだ。

伊沢家は国安家に借りがない。料理長とKUNIASURIゾートホテルの社長が同窓生という理由で選ばれている。

「借りはないのに、候補として選ばれるなんて」

これって凄いことではないのだろうか。

伊沢をフィアンセ候補の一人にしたのは、きっと彼女の父親の存在が大きいに違いない。

評価が高い伊沢総料理長を逃がさないために、彼の娘を取り込もうと思っても不思議ではないからだ。

資料では鈴森が最有力候補だが、実のところ伊沢の方が有利なのは？

利益は頭を使えば得られるし、箔は別のところで付加価値を探せる。しかし、既にホテルの顔として有名な総料理長の代えは利かない。

国安会長は、そういう人物と強固な絆を結びたいのではないだろうか。

どちらの女性を遥斗に薦めればいいのかわからないが、こうなれば出たとこ勝負で判断しよう。

詩乃が唇を引き結んで軽く頷いた時、執務室から岩井が出てきた。

詩乃はファイルを閉じ、デスクの上に置かれた他の書類の下にそれを隠す。

「大峯さん。部長がお呼びです」

「はい」

詩乃は立ち上がると、膝丈のプリーツスカート、シフォン地のボウタイブラウスを手で撫で付けた。さらに緊張を解くように、ハーフポニーテールにした髪を背中に払う。

遥斗との久しぶりの対峙に不安でいっぱいだったが、気持ちを切り替えて執務室に入った。

「失礼いたします」

大きな窓を背にして置かれた、大きなデスク。

遥斗はその椅子に座り、インカムで誰かと話をしていった。詩乃の姿を認めつつ、彼はパソコンの液晶画面に集中している。

「このプレゼンが成功すれば、確実に稼働率も上がりますし、雇用も生まれます。……今夜、先方とネット会議を行う予定なので、そこで要望を詰め、企画に反映させます」

岩井は遥斗に近づき、彼のメモを覗き込んで手元のタブレットにペンで書き込んでいく。

無駄な動きをしない岩井、そんな彼に。ペン先で指示する遥斗。その連携は傍から見ても見事だった。

それにしても、二人が並ぶと余計に目が離せなくなる。

三十歳の岩井は遥斗より細身だが、筋肉質タイプで胸板が厚い。洒落たワイルドアップバンダヘアをしているのもあり、男らしい色気を漂わせていた。

社内の女性社員たちは、遥斗らが揃って歩くたびに目を奪われているに違いない。

研修で岩井に教わっている時、詩乃が遥斗と彼の下につくと知るや否や、どれほど女性社員たちに羨ましがられたか。

「では、またのちほど」

そう言って遥斗がインカムを外し、正面に立つ詩乃に目を向けた。

「三週間ぶりだな。研修終了の報告は上がってきてる。祖父に言われたとおり……詩乃は俺の個人秘書として働いてもらう」

前触れもなく名前で呼ばれたせいで、遥斗とベッドで過ごした夜が鮮明に甦る。

あの時に感じた感情を頭の中から消し去るように、詩乃は力強く頷いた。

「いい心掛けだ。とはいえ、実際は岩井の下についてももらう。彼の指示は、俺の指示でもある。岩井に従ってくれ」

「わかりました、遥斗……いえ、国安部長」

「俺たち三人だけの時なら、名前で呼んでくれて構わない。そうすることで、何故君がここにいるのか、お互いにわかるから」

遥斗は鋭く言い放ち、さっと岩井を見る。

「前にも話したが、詩乃は会長が可愛がっている秘書だ。それを頭に入れておいてくれ」
「はい……」

遥斗と岩井のやり取りで、詩乃はようやく遥斗の真意が読み取れた。

名前で呼んだのは、あの夜のように遥斗の意思でどうとでもできると伝えるため。国安会長の名を出したのは、あくまで部下ではなく詩乃は客人であると線引きするためだ。

そうしてくれた方が有り難いのには、どういわけか炭酸水を飲んだみたいに胸の奥がざわざわ

する。

その気持ち悪さに顔をしかめた時、遥斗が「岩井」と名を呼んだ。

遥斗の視線が詩乃から逸れたことで、ようやく緊張から解き放たれた。

「ふう……」

詩乃は肩の力を抜くと詰めていた息を吐き出し、気持ちを落ち着かせてからもう一度二人に目をやる。

「今夜のネット会議について、通訊担当の三木さんと詳細を詰めてきてくれないか」

「すぐに行ってきます。大塚さん、研修時に教えた方法で遥斗さんのスケジュールを更新し、同期しておいてほしい。スケジュール管理については、君に一任する」

「わかりました」

「では、のちほど」

岩井は遥斗に頭を下げ、執務室をあとにした。

「詩乃、こっちへ」

遥斗と二人きりになるなり、傍に來いと手招きされる。急いで近寄ると、彼が支給されたタブレットを指した。

「専用のセキュリティナンバーを渡されて以降、まだ一度もアクセスしてないだろう？ 岩井に代わって俺が見よう。ここでやってみろ」

「は、はい！」

研修で学んだ手順で内部統制部の相互ファイルにアクセスし、さらに遥斗専用のスケジュール管理ができるよう同期の許可をもらう。

詩乃のタブレットにスケジュールが表示された途端、詩乃の目が点になる。分刻みではないしろ、ほぼ予定が埋まっていたためだ。

岩井がアシスタントとして有能なのは傍目にもわかるが、このスケジュール管理ではいつ遥斗が身体を壊してもおかしくない。

なんとか遥斗自身の時間をもっと設けなければ……

「これではデートもできない」

「何か言ったか？」

詩乃は今こそ計画に入るべく、朗らかな笑みを浮かべて顔を上げる。

「海外の方との会議があるので、夜も仕事をされるのはわかりますが、これでは心が休まらないかと。……国安会長が心配されるのも無理はありません」

「祖父が俺を心配？ いったい何を聞いた？」

遥斗はその話に興味があると言わんばかりにデスクに肘を突き、身を乗り出す。

「お忘れですか？ 国安会長が、わたしに遥斗さんのフィアンセ候補を見極めるようにとおっしゃったお話です。きつと、忙しく働かれていますので会う時間がないとおわかりだったんでしょう。岩井さんにもご相談させていただきませんが、よろしければわたしが遥斗さんのスケジュール管理を――」

「私的な部分に立ち入るのは、感心しないな」

遥斗が椅子に凭れて、冷たく言い放つ。ただ怒ったというより、彼にとって興味のない話をした詩乃を咎める風だった。

詩乃がそれを無視して突っ走れば、警戒心を抱かせてしまう可能性がある。今はほどほどが一番いい。

「申し訳ございません」

「部屋に戻っていい」

「失礼します」

執務室をあとにした詩乃は、自分の席に座って再びスケジュールの確認を始めた。

——約二時間後。

ようやく頼まれた仕事を終えた詩乃は、両手を突き上げて伸びをした。

「うーん、慣れないから疲れた」

絶対に動かせないものと、多少融通が利きそうなものを分類し、さらに見ただけでわかるように色付けして工夫を凝らした。

これで岩井のオーケーをもらえたらいいのだが……

もう一度ふーっと息を吐いて肩の力を抜いてから、壁掛け時計を確認する。十六時を少し回っているが、まだ岩井は戻っていない。

これからどうしようか。遙斗に指示を仰いだ方がいいのだろうか。執務室へ目を向けた時、不意に先ほどの遙斗とのやり取りが詩乃の脳裏に浮かんだ。そういえば、何故遙斗はフィアンセ候補たちの話に興味を示さないのだろうか。普通なら自分の妻になるかもしれない人がいれば、詩乃のように気にするものなのに……詩乃は書類の下に隠したファイルを手元に引き寄せ、それを指で叩きながら理由を探す。しかしいくら考えても、まったく浮かばない。

詩乃は降参するように嘆息したのち、室内をぐるりと眺めた。

その時、背の高い書棚の上に無造作に置かれたファイルが目に入る。

他の書棚は整理整頓されているのに、どうしてあれだけあんな場所に？

岩井からアシスタント室にある資料は好きに手に取っていいと聞いていたが、一応彼が在室中に見せてもらうつもりでいた。

でも、いつ落ちてもおかしくないこの状況は気になる。

とうとう詩乃は席を立ち、コロが付いた回転椅子を書棚の前に持っていった。せめて崩れ落ちないようにファイルを置き直そうと思ったためだ。

ヒールを脱いで椅子に乗るが、足場がしつかりしないせいでがちゃがちゃと不安定に揺れる。それを踏ん張って堪えようとした時、変な方向に力んでしまい椅子が回転しそうになった。

「あっ！」

慌てて書棚に掴まり、椅子の揺れが収まるまで静かに待つ。

動けそうになると、詩乃はふうーと息を吐いた。

「大丈夫、大丈夫」

そう言つて、再び手を伸ばした。ところが、ほんの僅か距離が足りないため、届かない。椅子のスプリングが軋んで揺れる中、詩乃は今度はつま先立ちをした。

指先が震え、腕が攣りそうになる。

「んっ、もうちょっ……と！」

「何をしてる！」

突然響いた男性の声に驚き、詩乃はさっと振り返る。

それがいけなかった。椅子が一気に回転して身体が後方に投げ出されてしまう。

「きゃあ！」

「危ない！」

周囲の光景がぐるりと回り、天井が視界に入った。電灯が少しずつ遠ざかるような感覚に襲われる。

もしかして、このまま頭を打っちゃうの!? ——そう思った直後、身体に強い衝撃が走った。

「……っ！」

息が詰まるほどのインパクトを感じたが、何故かぶつきたはずの頭は痛くない。

ホッと安堵するも、自分を抱く力強さ、唇に触れる柔らかかなものに気付き、頭の中が真っ白になる。

これって、何……？

詩乃は恐る恐る^{まぶた}顔を押し開けた。

最初に目に飛び込んできたのは、黒い影。何がなんだかわからなかったが、次第にそれが誰なのか気付き、一瞬にして緊張が高まった。

遥斗にキスされている！

詩乃は力強い腕の中から逃げようとするも、あまりに突然のことに混乱して身体が動かない。しかしそれは遥斗も同じらしく、彼は唇を触れ合わせたまま驚きの眼差しで詩乃を見つめている。

詩乃の心臓が早鐘を打ち始めた。耳の傍で鐘を鳴らされているのかと思うぐらい、どんどん大きくなる。

なんとかしなければと思うのに、遥斗の温もりと詩乃を組み敷く体重を感じれば感じるほど、動けなくなつた。

ああ、お願い。早く離れて！

詩乃の心の叫びが伝わつたのか、遥斗がゆっくりと顔を離す。

唇に触れる柔らかな感触がなくなりホッと安心するも、それは数秒で終わった。遥斗はほんの僅か距離を取つただけで動きを止め、詩乃を見つめてきたからだ。

今もお、唇をなぶる遥斗の吐息。

この状況に空気がピンツと張り詰める。なのに、相反するように詩乃の体温が上昇し、身体が芯が疼いていく。

「はる——」

思わず口を開くが、それが間違いだと気付いた時にはもう遅かった。

遥斗の視線が意味深に唇に落ちる。詩乃は慌てて言葉を呑み込んだ。だが彼が顔を傾け、悠々とした所作で距離を縮めてきた。

待って、待って！ わたしは——言葉にならない声のため息として漏れると、遥斗が優しく口づけた。

「んっ！」

自然と身体が震える。それを合図に、遥斗がそこをついばみ始めた。ちゅく、ちゅくつと小さな音を立てられて、どんどん下腹部の深奥に熱が集中していく。

「んう……あ」

誘うような声が漏れたその瞬間を狙つたかのように、急に電話が鳴り響いた。

それを機に、二人の間に漂っていた怪しげな空気が弾ける。遥斗は雷にでも打たれたみたいに目を見開いて、さっと上体を起こした。

詩乃もあたふたと立ち上がり、乱れた髪やスカート、シフォンのブラウスの皺を伸ばしながら電話機に走る。

今起きた行為は、綺麗に忘れなければ……

遥斗が抱きしめたのは、詩乃を助けるため。唇が触れたのは、勢いあまってぶつかったためだ。たつたそれだけのことで、何も特別な出来事ではない。

そう自分に言い聞かせるが、だったら何故、遥斗さんはもう一度わたしに甘いキスを？”と混乱しそうになる。

遥斗の真意が知りたくなるが、それを必死に堪えて受話器を取り上げた。

「内部統制部・国安の執務室、大峯です」

『フロントの清水です。国安部長はいらっしゃいますか？』

「はい」

『鈴木明里さまが面会を求めていらっしゃいますが、いかがでしょうか？』

その女性って、もしかして遥斗のフィアンセ候補最有力者の!?

詩乃が振り返ると、何かを考えている様子の遥斗と目が合った。

「面倒ごとか？」

面倒？ とんでもない、こんなにいい知らせはない！

先ほど整理した遥斗のスケジュールでは、これから約三十分は空白となっている。会って話すには充分とは言えないが、最初の取っ掛かりとしてはそれぐらいの時間が一番いい。

「わかりました。では、国安を伴って伺います」

「何があつた？」

受話器を下ろした詩乃に、遥斗がすかさず訊ねる。

「鈴木さまがフロントにいらっしゃっています」

「鈴木森？ いったい誰……ああ」

眉間に皺を寄せて記憶を探っていた遥斗が、何かに思い至ったような表情になる。彼の素振り、鈴木森とは既に顔見知りだとわかった。

だったら話は早い。

詩乃はそそくさと荷物を持ち、遥斗を廊下へ出すためにドアを開けた。

「三十分ほどなら時間があるので、どうぞ彼女とお会いしてください。その間、わたしも会長からの指示を実行できますので」

遥斗はまじろぎもせず詩乃を見つめたのち、やにわに頬を緩めた。

初めて見る、遥斗の柔和な笑み。印象を一変させる顔つきに、急に詩乃の下腹部が重くなる。堪らず手にしたタブレットをきつく握んだ。

「俺の意思に反したフィアンセ候補……ね」

そう言った直後、遥斗の表情が少しずつ崩れていき、頬が引き攣っていった。

「とはいえ、無礼を働いていい相手でもない。礼儀を尽くさない」と

「もちろんです。さあ行きましょう！」

遥斗を廊下へ通そうとする。しかし、彼は詩乃の正面でびたりと足を止めて、いったい何を考えてるんだ？”と言わんばかりに凝視してきた。

思わず身構えてしまうが、遥斗の眼差しに黙って耐えていると、ようやく彼が歩き出した。

問い詰められなくてホッとするものの、すぐに緊張が戻る。遥斗の広い背中から、詩乃に対する苛立ちがひしひしと伝わってきたからだ。

詩乃はこれ以上遙斗を煽らないようにするために、エレベーターが到着するまでの間も口を嚙み続けた。しかし、ずっと続く無言の圧力にととう胸が苦しくなる。鼓動が弾み、呼吸のリズムも不安定になっていく。

「遙斗さん、あの！」

何を言おうか考えもなしに声をかけたが、そんな詩乃の目に飛び込んだのは、遙斗の曲がったネクタイだった。

もしかして、詩乃を助けた際に乱れて？

詩乃は遙斗に近づき、彼のネクタイに触れて形を整える。

「わたしを助けてくれた時にネクタイが曲がってしまったんですね。申し訳ありませんでした。奥さまになられるかもしれない方とこれからお会いになるのに……」

ネクタイの結び目が綺麗になる。満足して頬が緩むも、先ほどから遙斗が一切話さないのが気になって、そつと目線を上げた。

「どうされたんです——」

瞬間、詩乃は言葉を失った。詩乃の顔を見つめる遙斗の双眸に強い光が宿っていたからだ。

これまでの遙斗なら、冷たい眼差しを向けたり、言葉で牽制したりするのに……

遙斗を見返せなくなり、詩乃は急いでネクタイに目線を落とす。すると、彼はそこに触れる詩乃の手を掴んだ。

「徹底するんだな」

ハツとして面を上げる詩乃に、遙斗が顔を近づけてくる。

「なるほどね……。これまで詩乃を観察していたが、今回の流れでようやくわかった。祖父が詩乃を俺に預けた、本当の理由がね」

「本当の理由？ あの、いったい何を仰っているのでしょうか？」

詩乃が眉を蹙めると、遙斗がふつと苦笑いした。

「祖父がフィアンセ候補を見定めると指示を出したあの日、俺が候補の誰かに興味を持つよう動けとも言われたな？」

詩乃の心を覗き込ままんばかりの至近距離から、低音の声を響かせてはつきり告げる。

「……意味がよくわかりませんが」

なんとかして誤魔化さなければと思うのに、言葉が出てこない。

すると、遙斗がさらに詰め寄ってきた。彼の体温が伝わってくる距離に少しづつ下がるが、すぐに壁にぶつかってしまう。

「だが、どうしてもわからないことが一つある。最初は反対したのに、何故急に態度を変えた？

そこに、どんなメリットがあった？」

「り、理由なんて、な、ないですよ！」

動揺したせいで、何度も舌を噛みそうになる。その振る舞いこそ、隠し事があると証明したようなものだった。